



岳といふ放牧場や薄暑光  
 ビルの空ジャックナイフのごと燕  
 弾丸に代へ百噸の滴りを  
 明日葉の花やキーウの子供たち  
 滝落ちて等身大の情けなき  
 鳥の巢の組まれ天ゆく船のごと  
 白牡丹崩れ落つ北極の壁  
 春深しワインセラ一の重き錠  
 桜薬降る身ぬちに深き轍かな  
 あの世界では歩いてみよう虹の上  
 子が担ふ家族の介護こどもの日  
 夏めくや玻璃に映りし我が老後  
 家の中覗く鶴や木の芽晴  
 \*  
 四つ足が武器なり蕨採りの欲  
 夏草の猛々しさよ小田実  
 今井愛子  
 松岡善郎  
 小林貴子  
 満田光生  
 村田朋美  
 水谷亮一  
 村上諒磨  
 海野良三  
 北村宣枝  
 長谷川みきこ  
 中原節子  
 上脇修  
 佐藤由美  
 田中清子  
 加藤律子

葛水や木鼠ねずみどもの過ぎし跡  
 二木 暖  
 憲法の日や先づサラダから食べ  
 小口洋子  
 陽炎や消耗品のやうに人  
 森山夕香  
 物増やさぬ暮し董の咲き揃ふ  
 上村敦子  
 粽開けつつ兄妹の居りし頃  
 沖野外輝夫  
 桃の木の老いの早きや幹の荒れ  
 岩間嘉一  
 菜種梅雨木椅子ぎちぎち羅須の家  
 千葉任子  
 若夏や穂波の洗ふ珊瑚礁  
 三島信子  
 茉莉花や恋しき人は痴呆症  
 渡辺正剛  
 みどりの日賑はふむしのうんこ展  
 中溝玲子  
 段々の代田怒濤へ千枚田  
 土屋敏弘  
 \*  
 永き日の雀とつぶり砂の中  
 松井 弓  
 ひとり寝の脈の確かさ遠蛙  
 高瀬かず枝  
 散り松葉積もりて足に優しかり  
 蔵之内利和  
 水中の野菜色濃き滝見茶屋  
 楠木ひろこ

# 半世紀へ——岳俳句七月

(527)

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭のことば 「岳」四十五周年記念大会に続き、句碑建立行事を行ったところ、「生涯に二度と体験できない感動でした」と、沢山のおたよりを頂戴している。二日にわたり二件の行事を行うのは、初めてのイベントであった。

いま、私は「俳句鑑賞」に関し、二冊の本にまとめながら、「類想」と独自の表現の違いに敏感になった。独自とは類想のすぐ脇にある。ものを見て「はっ」と気付くのは、類想の力を借りることだ。類想と独自とは隣同士。同じものを見ても「気付き方」の違い、あるいはそれは、表現の仕方の違いによるものかもしれない。『俳句必携一〇〇〇句を楽しむ』『俳句鑑賞二二〇〇句を楽しむ』を読んで、気付く勘を養ってください。

今回は選評で「類想の隣」の指摘をした。

岳は放牧場か——自由とは刺激を受け合うことである

岳といふ放牧場や薄曇光 小林 貴子  
牛は牛同士、馬は馬同士、山羊は山羊同士、独自さを深めること。放牧は互いに自由、知的感性を磨くためである。気付く力を磨くことである。鈍くては言葉が閃かない。

白牡丹崩れ落つ北極の壁 北村 宣枝

白牡丹が崩れる瞬間のスナップ。真っ白い北極の壁とは、隠喩が見事である。これも類想の隣。ときに表現の飛躍がない。

春深しワインセラの重き錠 長谷川みきこ

ワイン貯蔵庫がワインセラ。その錠が重いことから春の気怠い深まりを感じた感性は類想の隣。

桜蕊降る身ぬちに深き轍かな 中原 節子

桜に明け暮れたのであろう。ああ花も終わったという感慨。「身ぬちに深き轍」は単なる今年の花への思いではない。わが人生の花への思いか。これも類想の隣。

## 今月の秀句

弾丸に代へ百噸の滴りを 村田 朋美

ウクライナに滴りを。大胆な発想に感激した。なぜ破壊のみの戦いがあるのか。だれもそれを止めさせることができない。最先端の技術革新はあるが、一番素朴な人殺しを阻止できないとは、「人類遠くまで来過ぎ」ではないか。

ビルの空ジャックナイフのごと 満田 光生

ただ広いビルディングの壁。コンクリートの林立。その空間を自由自在に直線を描き続ける燕。比喩が切り裂く鋭さ。

明日葉の花やキウの子供たち 水谷 亮一

「明日葉」は、獅子独活の葉かと間違える。八丈草。お浸しにいい。てんぶらの材料にも。血流改善、老化防止、むくみ止め。花も独活のごとし。花言葉が「未来への希望」とか。いま戦場のキウの子供たちへ一番大事なプレゼントに。着想が抜群だ。

滝落ちて等身大の情けなき 岩上 諒磨

「情けなき」に呻る。気合を入れない。等身大とは情けなきもの。この捉え方に驚いた。滝は同じことの繰り返し。覚めている。

鳥の巣の組まれ天ゆく船のごと 海野 良三

梢に組まれた鳥の巣が天空を行く船とは、類想の隣である。

あの世では歩いてみよう虹の上 上脇 修

哀しい句だ。この世で叶わないことをあの世で。類想の隣。

子が担ふ家族の介護ごどもの日 佐藤 由美

現代社会が当面する問題に「家族介護」がある。子どもは子ども置かれてる現実を見つめる日。類想の隣。

夏めくや玻璃に映りし我が老後 田中 清子

ガラスに映ったわが姿に、はっとしたものか。

家の中覗く鶴や木の芽晴 加藤 律子

鶴は人懐っこい鳥だ。梢からわが家の中を覗いている。これから始まる春たけなわの季節に。おかしみがある。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

龍さんのバイク快適花ユッカ 佐藤 映二

三社祭出払つてゐる鍼医師 有手 勉

生き物の息の匂ひや新樹の夜 窪田 英治

深淵の上をふらここ生くるとは 志摩 晴樹

余花の山俘虜を悼みて全うす 百瀬石濤子  
別離とは後悔ばかりみどりの夜 高木 忠雄

人物詠からの戦後―小田実とは、苦渋の戦後の最たる良心

夏草の猛々しさよ小田実 松岡 善郎

戦後を考え抜き、安易な妥協を嫌った独自の生き方の闘士・小田実。その人生は壮絶である。夏草の気負いでの追悼か。

憲法の日や先づサラダから食べ 小口 洋子

センスがいい。感性抜群、しかも思慮が深い。類想の隣。

葛水や木鼠どもの過ぎし跡 二木 暖

夏の涼味、葛を微温湯で溶き冷やして飲む葛水は日本古来の暑さ除けには最高のもの。素朴だ。暖はフランス留学中の哲学者の卵。思索中のスナップと見る。ビュニャールしづ子さんとも交流が進み、異国ではなにより嬉しいことだ。

腸炎や消耗品のやうに人 森山 夕香

今月の秀句

四つ足が武器なり蕨採りの欲 今井 愛子

表現が秀でている。蕨採りはまず足腰が丈夫なこと。それが欲剥き出しの戦場での武器。見事な生きる現実を見せつけてくれました。いざ勝負は「四つ足」。秀でた類想の隣。

珊瑚礁に当たって洗う穂波が見えるようだ。沖縄の初夏。

茉莉花や恋しき人は痴呆症 渡辺 正剛

なんと申し上げていいものか。芳香を放ちジャスミンが咲く頃。わがジャスミンであった憧れの君がいまや。ああ。

みどりの日賑はふむしのうんこ展 中溝 玲子

大阪ですええ。緑むんむん「むしのうんこ展」に行列。最後には人間のうんこも展示か。(これは虫ではなかった。無視)

段々の代田怒濤へ千枚田 土屋 敏弘

能登曾々木の千枚田風景。裾曲の「怒濤」が凄い。句碑の除幕式にて、朗詠をお願いした。その敏弘さんの、怒濤を打ち消すほどの美声に感謝。

青雲集

永き日の雀とつぶり砂の中 松井 弓

歌曲「砂山」(北原白秋・中山晋平)調。「すずめ啼け啼け」「暮れりや砂山」。季語が抜群に効いている。越後の雀はなんとのんびりしていることか。良寛さんの調子だ。類想を抜けて見事に独自。

ひとり寝の脈の確かさ遠蛙 高瀬かず枝

「やうな人」ではない。特定な人ではなく、人類を問題にしている。腸炎が立つ大地の上では、アフガンでもウクライナでも日本でも、使い捨ての人間とは哀しいではないか。

物増やさぬ暮し董の咲き揃ふ 上村 敦子

堅実賢明な暮し。庭には董が満開。気付きが類想の隣か。

粽開けつつ兄妹の居りし頃 沖野外輝夫

五月の節句、「柱のきずはおととしの」(背くらべ・大正八年)を口ずさんだ頃。「粽たべたべ、兄さんが計ってくれた背のたけ」。貴重な記憶が今に生きる。働き盛りは記憶作り、人生の後半は記憶を楽しむ時期であろう。「行きて帰るころ」とは俳諧ばかりではない、芭蕉の名言である。

桃の木の老いの早きや幹の荒れ 岩間 嘉一

岩間桃園の主であった。見事な桃を生らせて人間を喜ばす桃。ご苦労な桃の木への労わりのことば掛けである。

菜種梅雨木椅子ぎちぎち羅須の家 千葉 任子

花巻で宮沢賢治が始めた羅須地人協会の家。家は、短い菜種梅雨時が一番馴染むのであろう。腰掛ければ木椅子は軋む。今も生きているのである。同時に賢治も健在とは命が長い。

若夏や穂波の洗ふ珊瑚礁 三島 信子

寝る前に脈に手を当てる。スマートに眠ることができる。これが儀式。若いのである。老人は怖ろしくて脈に触れない。ちよっとお洒落な作。

散り松葉積もりて足に優しかり 蔵之内利和

丁寧な詠い方である。踏み具合が心地よい。

水中の野菜色濃き滝見茶屋 鏑木ひろこ

店の前の水船が水甕に入れてあるトマトや胡瓜。「色濃き」に発見がある。「滝見茶屋」も特異な着眼である。類想の隣。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

翼持つ香水壺をいとしめり 金子 圭子

ひだる神付き纏ふ日のよなくもり 森 千恵子

青あらし遊ばせてゐる島ひとつ 松本よし乃

母の日や母が見てゐるから生きる 原田 宏子

春燈我が誕辰をほろ酔ひす 上岡 裕美

蜃気楼のごと銀巴里の青春 芳川莞久子

みんな檻樓なり行く春の母の家 依田 ひろ

桜蕊降る肩に手を置くやうに 布山千土里

刈草のにほひや父の参観日 穂苅 真泉

図書館の柱に眼梅雨湿り 関 礼子

柿若葉ことばを交はす楽しさよ 宮城 昭代